

氏名	吉 田 英 明
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1271 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和57年 3 月31日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）
学 位 論 文 題 目	正常初期妊娠超音波計測の臨床的意義に関する研究
論 文 審 査 委 員	教授 寺本 滋 教授 山本道夫 教授 木本 浩

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

厳密な諸条件を満たした妊娠 12 週までの正常妊娠例 35 例に対して、羊膜腔最長径及びこれと直交する二方向径、それらの和及び積、CRL（胎児頭臀長）を超音波断面法により計測した。妊娠日数と各計測値との相関は、CRL $r=0.864$ 、羊膜腔三方径の和 $r=0.866$ 、羊膜腔最長径 $r=0.856$ 、羊膜腔三方向径の積 $r=0.748$ が高かった。それらの直線回帰式はそれぞれ〔CRL(mm)〕 $=0.99 \times$ 〔妊娠日数〕 $- 42.0$ 、〔羊膜腔三方向径の和(mm)〕 $=3.23 \times$ 〔妊娠日数〕 $- 106.5$ 、〔羊膜腔最長径(mm)〕 $=1.09 \times$ 〔妊娠日数〕 $- 24.8$ であった、重回帰分析により、AIC が最小となる重回帰式は、〔妊娠日数〕 $=0.54 \times$ 〔CRL(mm)〕 $+1.16 \times 10^{-4} \times$ 〔羊膜腔三方向径の積(mm³)〕 $+45.70$ であり、重回帰係数は 0.897 であった。CRLの計測されていない症例に対しては羊膜腔三方向径の計測値により重回帰式を作成した。その結果〔妊娠日数〕 $=0.18 \times$ 〔羊膜腔三方向径の和(mm)〕 $+0.26 \times$ 〔羊膜腔最長径(mm)〕 $+33.3$ で AIC が最小となり、重回帰係数は 0.878 であった。これら 2 つの重回帰式の臨床的意義を検討するために月経不順例と超音波計測により有意に排卵の遅延が推定された症例 66 例の在胎日数平均値±標準偏差（SD）を求めた。最終月経より起算した在胎日数は 270.5 ± 11.8 日であり、超音波推定による在胎日数は 264.0 ± 10.3 日であった。これらと佐伯¹⁾の基礎体温測定による在胎日数 264.3 ± 8.8 日とを t 検定すると、超音波修正による在胎日数平均値がより佐伯の基準集団に近似している結果を得た。最終月経よりみた在胎日数と佐伯の基準集団との間には有意差があり、F 検定により分散の差をみても同様の結果を得た。これらより超音波計測による妊娠日修正は十分に臨床上有用であると考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は正常初期妊娠時の胎児，羊膜腔の発育に関する研究であるが，超音波計測を行ない，データ処理によって検討した結果妊娠日修正に関して重要な知見を得たものであって産婦人科領域において価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。